

ただキリストと共に歩む

水戸無教會

創刊号

編集 半田梅雄

「創刊にあたって」

松本文助

「汝らを誣う者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ」(ルカ六・二八)との聖言は理想の如く感じていた。そして之は傳道の如き場合に迫害を受けたとき、このような態度を取るべきであると考えていた。

然し、この世的の關係に於いては自分で正当であるとおもうことに、他からの批難攻撃を受けると、反駁や弁明や或はその不当をせめようとして昂奮する。果てには実力でも行使しない限り解決が出来ないかの如くまで思いつめるのであった。殊に相手が教会人の如き場合はイエスに対するあの学者パリサイ人の理不盡なこと、それと同じであることを指摘して、やりこめようとはばかりおもしろい、自分の矛盾には少しも氣付かずにはいた。

最近、またある事件に対し例の様に考え始め仕事するとき

勉強のとき執念深くおもしろい出していた。

ある夜の祈の時であつた。祈の中にそのことをも祈らんとした。その時「敵の為に祈れ」との声が心に響いた。私は祈り始めた。所が実に不思議なことに、心は一変し何とも云えないほほえみさえ感じ始めた。一点のわだかまりもない爽快さであつた。心の眼の鱗のごときものが落ちた。そして愛が敵に対する唯一無二の武器であることを知つたのである。

冒頭の聖言は私の血となつた。敵を愛することだ。本当に愛することだ。理屈でも実力でもない愛することだ。愛のみがこの世のすべてを浄化するのだ。神はその独子を賜うむほどに世を愛し給うたのである。(ヨハネ三・一六)独子イエスは神の御心にただ従つて己が身を十字架に釘打たれたのである。愛である。愛である。コリント前書の記者の書かれた信仰と希望と愛とこの三つの中最も大なるは愛であるとは実にアーメンで

ある。水戸無教会誌の発刊もまた愛の発露でなければならぬ。進まんかな、教友よ、同志よ、愛のシンボル十字架を負うて。

祈り その(一)

大森孝夫

「余は信じて救われるのみならず、亦信ぜしめられて救われるもの也。此に於てか余は、全く余を救うの力なきものなるを悟れり。然れば余は何をなさんか、余は余の信仰をも神より求むるのみ。キリスト信徒は絶え間なく祈るべきなり。然り彼の生命は祈禱なり。彼尚ほ不完全なれば祈るべきなり、彼尚ほ信足らざれば祈るべきなり、彼能く祈り能わざれば祈るべきなり。恵まるるも祈るべし。のろわるるも祈るべし。天の高きに上げらるるも、陰府の低きに下げらるるも、我は祈らん。力なき我、わが能うることは祈ることのみ。」

塚本師も、この説はキリスト自身の靈感によつたものとして、我々が聖書を研究し、信仰を求めるとする場合にもこのことを理屈でなしに解らなければならぬと訓えられるのでした。これを先生の言葉を借りていえば「神様は生きてゐる、生きてゐることは生命である、生命であることは

いわゆるこつと屋の品物などとは異なる。生命は凡てのものをいかす力である。――これはヨハネ伝一一・二五にも述べられてある通り――神に関する限り凡ては生きてゐるのだ」とさとされました。そして尚「このように神は凡てのものを生かそうとされてゐるのだから、神を信ずればパンがなくても生きられる。この土台を忘れて神学も聖書研究もない」と主張されるのでした。そして最後に「根本は幼児の如くなることから始まる。これはなれますよ神と共にいるときは段々と幼子の如くなります。」又「私は聖書と共に古い、然し聖書と共に新しい」とまで喝破される師

の勝利は尊いものと感じさせられました。

本誌の発行にあつて深い祈りを込めて下さつたK兄始め先輩諸教友に心から感謝を捧げます。編集部

荒野についての序論(一)

石原秀志

バプテスマのヨハネは「荒野に呼ばれるもの」としてその宣教活動を行つた。イエス御自身も聖霊を受けられて後、四十日に亘つて荒野に試みられ給うた。パウロも異邦人の使徒として第一歩を踏み出そうとする前にアラビヤの碓野に導かれたのであつた。

荒野はかくして、新約聖書に於ては、神がその召し給ひし者を遣さんとするに當つて、特別な訓練を与え給うた場として極めて重要な意味を持つ。更に進んでアウグスチヌスにも、ダンテにも、ルツターにも、或は我が内村鑑三にも荒野の深刻な体験が、彼

等の信仰的人間の形成に対して果した役割は極めて重要であつたと言つてよいであらう。

然し、今問題を旧約の世界に限つて多少の考をして見よう。

荒野(Desert)は時に砂漠と同義に用いられる事があるが、要するに沃野の反対概念である。唯瘦地と言うに止まらない。それは全く乾燥した不毛、堯堯の地の事である。

人類はその文化を沃野に開始した。黄河の流域、ガンジスのほとり、チグリス・ユーフラテスの一帯、そしてナイルの三角地帯は凡て豊沃な生産地域であつた。温和な気候と豊かな生産力とは、人間に文化を生み出す余裕を与えたであらう。

文化とはもと耕作と同義に発した語である。沃野は自然のままでは人間に取つて無価値である。しかし人間がその自然に働きかけた時に、沃野は豊かな生産力を發揮してくるのであつた。

荒野は沃野ではない。それは耕作の対象としては余りに不適當である。水のない、石礫の間より人間の労働の結果何を生み出しうると言うのであるか。かくて荒野は不毛であつた。そしてその事は荒野に於ける人間の文化についても略同様であつたと言えよう。

人はモンスーンの風土、砂漠的風土、牧場的風土の三つを文化の類型として提示するが、砂漠的人間の特性として服従的と戦斗的との二つが挙げられる。その特性は今尚世界の各地に分散せしめられたユダヤ民族の間に強固に保持されているが、併し砂漠的人間の最大の功績は人類に人格神を与えた事であつたとされる。(和辻哲郎、風土)

砂漠には砂原的なものと岩石的なものがあつて、後者は前者に比してより砂漠性が強烈であると言へる。旧約の宗教は風土的には砂漠の宗教といわれるが、その砂漠はモーセ時代の岩山的砂漠の謂であつて、此所に見出される

のは、烈しい一回的な異変を以て人に迫る激しさであった。

その宗教は、かくて、此の激しい砂漠むしろ荒野の中に、聖なる実在に直面して打ち倒され、そして新しく生かされた者のそれであった。

(関根正雄、イスラエル宗教文化史) (未完)

讚美歌について

半田 信子

讚美歌とは読んで字の如く神をほめたたえまつる歌であるが、そればかりではなくて、キリスト信者の敬虔な祈りでもある。私達は、喜びの中にあるときには勿論、その喜びを感謝し、その聖をたたえる。又讚美の歌も自ずと口をついて出て来るのであるが、その反対に大いなる悲しみ、又苦しみが襲い来た時に、キリストの御救を知らず、御愛を知らない人達のように絶望のどん底に陥る事なく、希望を失わず、主に頼

り、主に祈り、主を見上げて更にその聖名を讚美し感謝することの出来るのは、私達クリスト者のみに与えられた大きな特権であると思う。

又死に直面した時、遂に行く途とはかねて聞きしかど昨日今日とは思わざりしを、と嘆き悲しんだりせず、天国を臨んで静かに神を信じつつ死につくというのも、主の御救いに与つたものならではないことが出来る。こういう美しいクリスト者の姿は私達によく見聞きするところである。例をあげるなら、あのタイタニック号が初の航海の途、冰山にふれて沈ぼつてゆく時数千の乗客が「主よみもとに近づかん」と歌いながら従容として死についたという話は余りにも有名である。最近特に私の胸をうつつたのは、映画「クオヴァアデイス」の一場面である。ネロの迫害にあつて今まさに獅子の餌になろうとしている多くのクリスト者が刑場で互いに慰さめ励まし合いながら、天を臨み讚美を口にしていたその姿で

ある。ああいう光景、荘厳な然かも美しい有様は信仰なくしてはあり得ないことと思われる。

教会音楽も随分発達して来て、美しい讚美歌に引き寄せられたいわゆる讚美歌クリスチャンの多い現在、私達の口から出ずる讚美歌が私達の頭から出ずるのではなくて、私達の信仰から、うたわでやあるべきといったその心から出ずるものでありたいと願うものである。どんなに美しく歌われたく、どんなに美しく歌われた讚美歌であっても、そこに眞の意味の讚美の心が伴わないとすれば、それよりは、たとえ拙くとも敬虔な気持ちで祈りと感謝の気持ちをもって歌う歌の方を、神様はきつとおよび下さることと思うのである。

主に向いて心より

且つ歌い、

心より賛美せよ。

(詩篇五〇十八〜十九)

随想

小貫武壽

昨年、矢内原先生が来水した直後、二三人の友人が集まって定期的な集会を持つという話が出て、以来水戸無教会が誕生した。二三人我が名によりて集る所には我もそのうちに在るなり(マタイ十八・二十)とイエスが云われた様に、此の集會は実に聖なる集いとなつた。数の多いのを誇る勿れ、最も大切なことはその中にイエスの生命が生きているかどうか、ということである。この集いも少数ではあるが、各人よく聖書を研究し、無心に集まつて居られるのである。

又この度雑誌「水戸無教会」の誕生を見たことは洵に喜ばしき限りである。願はくは永くその使命を果たされんことを祈る。

それにつけても私は集會に家の都合で出席できなくなつたので非常に残念である。

私の家は商家であつて、土曜日曜と云うと忙しく、家の

者も此の日は特に力を入れる。であるから、私自身としても一人非協力なのは心苦しく、又親達にも猛烈に反対されて了つたので、とうとう諦める事にした。併しどうも安息日を忘れて了うことは心もとないので、夜だけは守ろうと思ひ十字屋さんの集会だけは出席させて貰つて居つた。

そうしないと、私はまるきり骨抜きになつて了いそうなのである。心では愛と義に根ざした生き方をしようと思つても、特に商売は誘惑が多いので、毎日スツキリしない思いを残して居る。営業の面は幸いにして親達を始め皆が頑張つてくれるので順調であるが、心の奥では未だ未だピツタリしないものがあり、又經理の事などで公明正大になり得ない点等不満の点が多い。いろいろ思いつつも勇氣が無い許りにふんぎりがつかずぐずぐずして毎日を送つて居るのである。

何時かS先生に「信仰はやはり徹底しなければいけない」と言われたが、スツキリしな

いは徹底しないからである。之は洵にいけない事である。が併しいざ事にぶつかると恐しくてなかなか出来ないものである。

全く心の悩み、否斗いは大きい。正しく生きる為にはやはり絶えず眞剣に祈らなければいけないようだ。私は何時も祈りを忘れ、祈る気分にならない事が多い。祈れない状態にあるときは既にいけないのかも知れない。

「汝等は地の塩なり、塩もし効力を失はば何をもてか之に塩すべき（マタイ五・十三）」とイエスは云われた。

私はこんな状態で自分の生き甲斐すら見失うことが多いけれども、われわれは地の塩としてこそ価値がある。であるから、見映えなく、嫌われても、信ずる俥、思つた俥を語り且実行していかねばならぬ。例え失敗しても、神さまは守り又起こして下さるであらう。それを信じて生きなければ、斗わなければならぬ。

妻への手紙

半田梅雄

勤務は如何ですか？友部を発つてからもう二十日になりますね。今日そちらに勤められたという便りを貰つた時、急に胸が一ぱいになりました。おばあちゃんに預けられた信仰も何だか可哀そうな気がします。

別便で聖書を送りました。経済のために聖書を忘れるようならむしろ働かぬ方が良くと思うのです。私が何時も云うように、働きながら毎日の生活の中で聖書を学ぶことが大切です。こうして遠く離れて暮す時、私たちは本当に聖書の眞理を学ぶことが出来るでしょう。親子三人別々に離れて暮すこの機会が、どんなに私たちの信仰を高めてくれるかはかり知れないような気がします。私たちは余りお互いに頼りすぎていたようです。余りに人間的に愛し過ぎるから、それで毎日が一ぱいになつてしまつて、神様の深

い聖い愛を忘れ勝なのだと思います。コリント前書七章でパウロが述べているところをよく熟読して下さい。今こうして離れてみると、しみじみ大きな愛と恵みによつて私たちが神の子とせられて居ることを感じます。このことが判つて今度の福島行きは実にすばらしい賜物だということを感じずにはいられません。すべてのこと益となるとパウロは云いましたが正にその通りです。

文雄は百姓になる決心を固めたようです。菊池さんのところでいろいろ話合いました。勿論新しい土地を手に入れることも必要になつて来ますが（その費用も）、その為に苦勞することは私たちによろこびです。この方向は私には一番堅実な道のように思われるから尚更そうです。彼の不徹底な気持ちは売店のことでもはつきりあらわれています。簡単に始めようとすることは、簡単に成功するだろうという甘い考えが基礎にある為です。彼の最大の欠点は、

今まで本当に生きてゆくことの重大さ、殊にしつかり大地に足を踏んまえてゆくことを知らなかつたことです。然し今度の決心を通して彼は次第に学びつつあるのは嬉しいことです。

一人暮しになって、私は久しぶりに彼に觸れることができませんでした。私の心は普段あまり御身や信介に占領され過ぎていますから彼は淋しかったに違いありません。そのことについて私はイエスの生涯やパウロのことをしきりに思っています。本当に一人一人を愛するということ、しかもそれが潔められたものである為には一人暮らしも止むを得ないものであると云うことを。

優れた伝道者は大が家庭的に悲運の人が多いのもその為かもしれません。パウロは生涯独身でしたし、藤井武先生は奥さんを失つてから一層天的な清さに生き貫きました。塚本先生のあの高い信仰は震災で奥さんを失われた事が直接的には原因となつていると思ひます。内村先生は奥

さんに運のない人でしたし、愛児ルツ子を失つてからかえりて強い信仰を恵まれていませぬ。勿論これは一つの例です。私たちは良き結婚を恵まれている。その事を単にオシドリ夫婦で止まるべきではないと深く深く思うのです。

後記

一昨年十二月鈴木俊郎先生をお迎えしてから昨一九五四年に於ける福音の水戸市攻撃は凄まじいものがあつた。黒崎幸吉、矢内原忠雄、斉藤茂の諸先生の相次いでのお来水、間接的にはあるが塚本虎二先生もこれに参加せられて、松本兄の表現を借りれば、まさに水戸城の石垣は崩されたのである。一方には水戸学に基礎を置く伝統的国粹主義、他方には零細な商業都市として根深い実利主義、それらに加えて敗戦後のたい廃的風潮と水戸人の性格故に激烈なソシアリズム的傾向等頗る複雑な思想的背景を持つ水戸市、而してカトリックとプロテス

タント諸教派の教会も決して少ない数でない水戸市。

ここに神は福音のみを武器とする新しいそして最後の攻畧を開始されたのである。これに用いられるものは無名の一公務員、一商人、一農民に過ぎない。その力は極めて弱く、その声は甚だ低い。然し思い見よ！ガリラヤ湖畔におけるイエスの伝道の最初の弟子数人は実に一漁師の息子たちに過ぎなかつたことを！！社会的身分、学問の多かが福音を決定しない。進めるも退くも神御自身のみ意による。水戸無教会は神のみにより頼み、神と共に歩む。ただキリストと共に進むところ。勝利は既に我が内にありである。(半田)

お知らせ
(斉藤茂先生よりお知らせ頂きました)

内村鑑三先生

二十五周年記念講演会場所 麴町女子学院大講堂
第一日

三月二十六日(土曜) 午後
講師 政池仁先生

石原兵永先生
鈴木俊郎先生

第二日
三月二十七日(日曜) 午後

講師 矢内原忠雄先生
黒崎幸吉先生
塚本虎二先生

昭和三十年三月一日発行
水戸無教会創刊号

実費十円 千八円
編集権印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原四六四二
水戸幼稚園内
水戸無教会

日曜集会

毎週日曜日午前十一時より
水戸市東原町水戸幼稚園にて
ガラテヤ書研究 半田
ヨブ記研究 大森
参加自由、但しヨブ記研究は
午後昼食を共にした後です。